

大豆の吸実性カメムシ類が増加しています！

大豆の吸実性カメムシ類（写真1～5）は成虫・幼虫ともに子実を直接吸汁加害し、加害期間は子実肥大期間を通じて長期に渡ります。特に、幼虫はほ場内にとどまり被害を増大させるため、注意が必要です。子実肥大初期の加害では、子実の肥大不良や変形等による減収や大幅な品質低下を生じます。一方、子実肥大中後期の加害では、吸汁による変形・変色（吸汁痕（写真6））した被害粒を機械で選別・除去することが難しくなり、品質が大きく低下します。

8月中旬に県内15地点の大豆ほ場において見取り調査を行った結果、**吸実性カメムシ類成虫の発生ほ場率・頭数は、いずれも平年と比べて高い（多い）**状況でした（表1、図1）。さらに、ホソヘリカメムシのフェロモントラップへの総誘殺数が、平年に比べ多い地点が複数見られています（栃木市大塚：平年比 212%、日光市木和田島：同 208%）。ほ場における吸実性カメムシ類の発生動向に十分留意し、適切な防除を行いましょう。

表1 大豆における吸実性カメムシ類の発生状況(8月中旬)

分類	発生ほ場率(%)		頭数(頭)/25株		概評
	本年	平年	本年	平年	
成虫	40.0	14.1	0.5	0.2	多
幼虫	0.0	2.3	0.0	0.1	少

※平成29年8月14日～16日、15地点30圃場で見取り調査を実施

※平年値：平成19年～28年の平均値

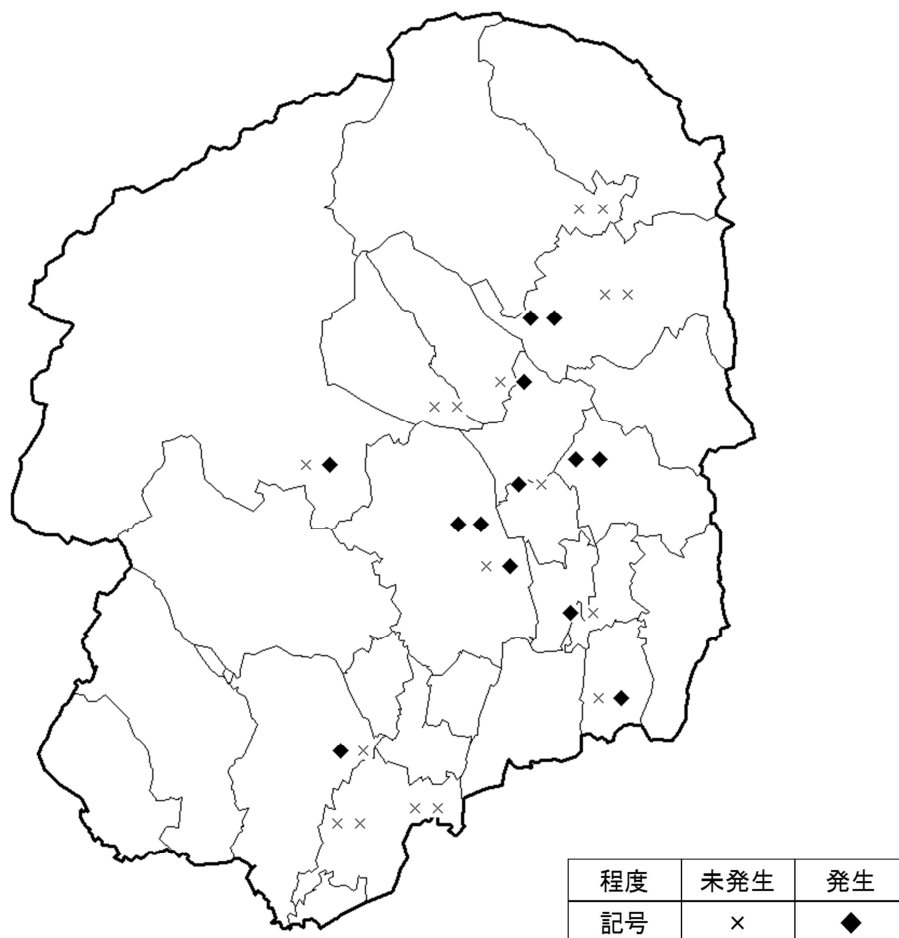


図1 吸実性カメムシ類成幼虫の地点別発生状況



写真1 ホソヘリカメムシ



写真2 イチモンジカメムシ



写真3 アオクサカメムシ



写真4 ブチヒゲカメムシ

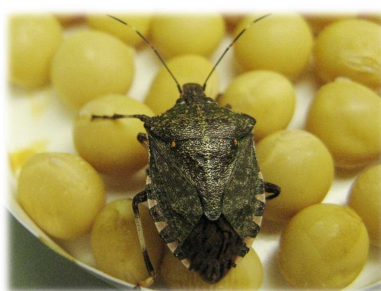


写真5 クサギカメムシ

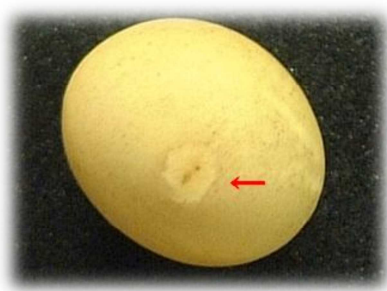


写真6 子実の吸汁痕

◎防除対策

開花期の15日後から次のいずれかの薬剤を、10～14日間隔で3～5回使用する。
 なお、薬剤は莢によくかかるように散布する。

表2 大豆の吸実性カメムシ類に登録のある主な薬剤（平成29年8月9日現在）

農薬名	希釈倍数	使用時期	本剤の使用回数	成分の総使用回数	成分	農薬の系統	RACコード ^{※1}
スミチオン乳剤	1000倍	収穫21日前まで	4回以内	4回以内	MEP	有機リン	I:1B
ダントツフロアブル	2500～5000倍	収穫7日前まで	3回以内	4回以内 ^{※2}	クロチアニジン	ネオニコチノイド	I:4A
スタークル液剤10	1000倍	収穫7日前まで	2回以内	3回以内 ^{※3}	ジノテフラン		
スタークルメイト液剤10							
トレボン乳剤	1000倍	収穫14日前まで	2回以内	2回以内	エトフェプロックス	ピレスロイド	I:3A
キラップフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	2回以内	2回以内	エチプロール	フェニルピラゾール	I:2B

※1 RACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

※2 は種時の土壌混和は1回以内、散布は3回以内。

※3 は種時の土壌混和は1回以内、散布は2回以内。

詳細は、農業環境指導センター（Tel. 028-626-3086）までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは、「農政部ツイッター(@tochigi_nousei)」、[農業環境指導センターホームページ](http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html)（<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。